F/T09 フェスティバル/トーキョー

PRESS RELEASE

さいたまゴールド・シアター

『95kg と 97kg のあいだ』

演出:蜷川幸雄　作:清水邦夫

3 月 18 日(水)～29 日(日)

於:にしすがも創造舎

(C)宮川舞子

1200 人を越す応募者の中から厳しいオーディションを勝ち抜いた、
55 歳以上の団員で構成される演劇集団。
「世界」を活動の場とする演出家・蜷川幸雄が、新たな創造への挑戦
の場とするカンパニーの最新作、堂々の再演＆初の県外公演！

お問合せ:フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局
〒170-0001 東京都豊島区西巣鴨 4-9-1 NPO 法人アートネットワーク・ジャパン内 TEL 03-5961-5202/FAX 03-5961-5207
F/T 広報担当:及位(のぞき)、ハッセル toiawase@anj.or.jp

さいたまゴールド・シアターとは？

2005 年 11 月、彩の国さいたま芸術劇場芸術監督に内定した蜷川幸雄が、就任後第一に取り組むべき事業として提案したのが、「年齢を重ねた人々が、その個人史をベースに、身体表現という方法によって新しい自分に出会う場を提供する」ための集団作りだった。蜷川の構想をもとに、06 年 2 月より団員募集を開始。当初 20 人の募集枠に 1200 名を越す応募者があり、3 月中旬から 2 週間にわたるオーディションを敢行。難関を突破した 55 歳から最高齢 80 歳までの 48 名（現在は 42 名）が所属する、「さいたまゴールド・シアター」が 4 月 21 日に正式発足した。
団員は週 5 日、一日 4 時間程度のレッスンを、蜷川を筆頭にした演劇の第一線で活躍する講師陣より受講。8 月と 12 月の途中 2 回、「Pro-cess」と名づけた中間発表公演を行い、翌 07 年 6 月、第一回公演として岩松了による新作書き下ろし戯曲『船上のピクニック』を上演した。
職歴など、団員の過去の経験を生かしたキャラクター設定と、再雇用を求めてとある島に向かう船に乗り合わせたベテランのホテル従業員が、漂流してきた言葉の通じない難民たちに遭遇するという現代を照射する設定は、一年で俳優としての技術と存在感を身につけた団員たちの成果と共に、高く評価された。また、演劇界の枠を越え、日本の高齢化社会の在り様に問いかけるモデル・ケースとして、広くマスコミで報じられた。

作品解説

『95 kgと 97 kgのあいだ』は、85 年に劇作家・清水邦夫が蜷川の主宰する「GEKISYA NINAGAWA STUDIO」のために書き下ろした戯曲。清水・蜷川コンビの名を一躍世に知らしめた傑作、『真情あふるる軽薄さ』（69 年初演。2001 年に蜷川演出により再演されている）の、「その後」を描くかにも思える内容となっている。
08 年 5 月上演の際には、「一群」にさいたまゴールド・シアターの団員を、「行列」に NINAGAWA STUDIO の俳優をキャスティング。対象的なふたつの集団を実年齢でも対照的な二集団が演じることで、明確な物語を持たない戯曲に揺るがしがたいリアリティを持たせることに成功した。
また、40 名を越す団員の絶妙のアンサンブルと、生活者としての肉体、その実体験を生かした台詞が生み出す存在感など、さいたまゴールド・シアターの持つ「武器」をフルに生かした演出は、20 年以上前に執筆された戯曲の核心である時代への不審と疑問、それを凌駕しようと渦巻く人間の生命力を見事に再生させ、観客を圧倒した。
今回は劇団にとって、ホームグランドである彩の国さいたま芸術劇場を出た初の外部上演となる。ゴールド・シアター創設の際に蜷川の中にあったイメージは、ポーランド前衛演劇の旗手であるタデウシュ・カントール率いる劇団クリコット 2 による『死の教室』。老人にも死者にも見える俳優たちが、身体に刻み込まれた歴史を音楽的に舞台上に解放する作品は、82 年の来日公演はもちろん、世界中に衝撃を与えたが、ゴールド・シアターと『95 kgと 97 kgのあいだ』も今回、その集団と演劇表現の持つ可能性の大きさで、客席を驚愕させることになるだろう。

あらすじ

「行列」の芝居の稽古をしている若者たち。そこに突然現れる、かつて「行列」の芝居に出演していたという「一群」。彼らを率いる「青年」が号令をかけると、「一群」の人々は、それぞれに架空の砂袋を背に担ぎ始める。
30 kg、50 kg、70 kg…。「青年」の号令はしだいに熱気を帯び、砂袋の重さはどんどん重くなる。やがて 95 kgと 97 kgのあいだ、わずか 2 kgの差をいかに明確に表現するかを巡り、「青年」と「一群」の行軍は我と我が身に鞭打つ苦行に似た暴力性をはらみ、「一群」を囲む「行列」の若者たちを挑発し始める。「青年」と「一群」、そして「行列」の間に、新たに赤い服の女が現われ、「一群」の愚かしさや「青年」とのかつての情交を妨害するように語るが、彼らの歩みは止められない。
肉体的・精神的にに追い詰められていく「一群」の人々。その胸には次第に様々な想いが湧き上がり、やがて溢れるように個々の過去が吐露され始める。

アーティスト・プロフィール

演出：蜷川幸雄　Yukio Ninagawa

1935 年、埼玉県川口市出身。55 年に劇団青俳に入団し、67 年に劇団現代人劇場を創立。69 年『真情あふるる軽薄さ』で演出家デビュー。74 年日生劇場『ロミオとジュリエット』で大劇場の演出を手掛ける。以後、日本を代表する演出家として話題作を次々世に送り出している。
また、83 年の『王女メディア』ヨーロッパ公演を皮切りに、海外公演を開始。96 年『夏の夜の夢』、97 年『身毒丸』、98 年『ハムレット』をロンドンで連続公演、99 年～2000 年ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー（RSC）の演出家として『リア王』を日本・英国で長期上演して世界の注目を浴びた。ロンドン・グローブ座のアーティスティック・ディレクターの一人でもある。2000～01 年には、彩の国さいたま芸術劇場で「蜷川イヤーズ」が二年に渡って開催され、作品が多数上演された。彩の国シェイクスピア・シリーズ（SSS）では、シェイクスピア全作品上演計画を敢行中。2009 年 1 月の『冬物語』で 21 作目となる。

作：清水邦夫　Kunio Shimizu

1936 年、新潟県出身。早稲田大学文学部演劇科卒業。「木冬社」代表。69 年に上演された『真情あふるる軽薄さ』以来、『ぼくらが非情の大河をくだる時』『タンゴ・冬の終わりに』など、演出家・蜷川幸雄とのコンビで多数の戯曲が上演される。反体制的な若者を主軸とする作品は、同時代の若者を中心に絶大な人気を得た。74 年、岸田國士戯曲賞、90 年・93 年芸術選奨文部大臣賞受賞。テレビやラジオドラマのシナリオ執筆も数多い。

出演：横田栄司　Eiji Yokota

東京都出身。文学座座員。これまで舞台、映画、テレビと幅広く活動。
主な舞台に、さいたま芸術劇場では『リチャード三世』『近代能楽集』『タイタス・アンドロニカス』『リア王』『ガラスの仮面』がある。ほかに『ひばり』『カリギュラ』『ヴェニスの商人』など。それ以外では映画『独立少年合唱団』、テレビ『私立探偵・濱マイク』第一話など。

出演：NINAGAWA STUDIO

1984 年、演出家・蜷川幸雄によって若い世代の俳優、スタッフを集めて演劇集団「GEKI-SYA NINAGAWA STUDIO」として創設。以来、従来の劇団としての組織ではなく、個々の自立した個性の集まりとして独特の活動を続ける。養成所の俳優訓練ではなく、稽古場での実践的なエチュードを通じて俳優の訓練を行っている。

特別寄稿

『95 kgと 97 kgのあいだ』解説

徳永京子(演劇ライター)

役者の上手さとは何を指すのか。職業柄、よくそんなことを考える。
もちろん答えは常時更新中だ。役のキャラクターがにじみ出るたたずまい。自然で、なおかつ観客への浸透度が高いせりふ回し。戯曲や演出への理解度と、それらが力不足である際の応用力。登場した途端、劇場の空気を引き締める集中力――。優れた戯曲とは、いい演出とはどんなものかという問題と同様、その時々で感銘を受けた作品によって、定義は上書きされる。言い換えるなら、定義を上書きしたくなるものこそ私にとっての優れた作品であり、古びていく回答をリフレッシュしてくれる舞台が観たくて、せっせと劇場に通っているのである。

そんな中、更新云々をすっ飛ばし、「役者の上手さとは何を指すのか」という設問そのものの意味をぶち壊してくれたのが、さいたまゴールド・シアターだった。

改めて説明する必要はないかもしれないが、さいたまゴールド・シアターとは、彩の国さいたま芸術劇場が 2006 年に設立した演劇集団だ。最大の特徴は、入団資格が 55 歳以上であること。発起人は蜷川幸雄で「年齢を重ねた人々が、その個人史をベースに、身体表現という方法によって新しい自分に出会うことは可能ではないか？」と考えたのが、立ち上げの動機だという。そのため団員は、演劇経験の有無を問わない一般公募で集められた。予想を遥かに上回る 1266 名の応募者に対し蜷川は、当初予定していた書類選考を「この人達の人生を履歴書１枚で判断できない」と急遽取りやめて全員面接を敢行し、48 名の合格者を選出した。
『95kg と 97kg のあいだ』は、ゴールド・シアターの２回目の本公演だった(06 年に2回の中間発表公演、07 年には第１回本公演を行なった)。ストーリーはこうだ。長い行列がある。小競り合いも生まれハラハラするが、次第にそれが、行列の稽古をしている役者の集団だということがわかってくる。と、そこに別の一群が乱入する。乱入したのは、かつて行列を演じた人々。彼らはそこでいきなり稽古を始める。重い砂袋を担いで延々と行進する、という稽古を。この、突如現れる一群を演じたのがゴールド・シアターだった。横田栄司演じる厳しい青年に罵倒され、時にほめられながら、砂袋の重さのわずかな違いの表現に一群は熱中する。目的の見えない、しかし鬼気迫るようなその熱中に感化され、最初に行列の稽古をしていた人々も、やがて砂袋の行進に加わっていく――。

もともとは 85 年、NINAGAWA STUDIO の若い役者ために書かれた清水邦夫のこの戯曲(ゴールド・シアター公演では、現 NINAGAWA STUDIO の団員が最初の行列の役で多数出演)が、何を目的に書かれたかと言えば、それは“虚が実を超える瞬間”だろう。舞台に登場してから幕切れまで、一群がほとんどの時間を費やすのは、腰を落とし、両足を踏ん張り、全身に 90 数キロの重みを感じるフリをする、という演技だ。せりふらしいせりふはない。もっともらしい起承転結も特にない。誰かの見せ場があるわけではないから、誰も休めない。問われるのは、持続と瞬間。青年はハイスピード、ハイテンションで次々と誰かひとりを指名し、大声でダメ出しをし、自ら汗だくで見本を示しては、また次の役者に指示を出す。応える一群はだから、全身全霊を賭けて重い砂袋を担ぐ瞬間を持続する。その持続と瞬間が役者の心身を追い詰めることは、容易に想像できる。だが追い詰められた彼らの演技はある瞬間、一気に沸点に達し、私

達観客へと伝播する。存在するはずのない砂袋を観客に目撃させる。重そうなフリが本当の重さや苦しさや達成感になって、観客に自分の体感と一体化する感覚を体験させる。

第１回の本公演『海上のピクニック』(07 年)でゴールド・シアターに教えられたのは、技術的な上手さを凌ぐ味わいだった。短くない時間を非・演劇人として生きてきた人、その体に染みついた様々な癖は、確かに「個人史」と呼べば格好が付くが、実際に観れば、動きも発声もぎこちない。ところが岩松了が書き下ろした戯曲と蜷川の演出は、彼らの頑固なぎこちなさを、豊かな青い苔のごとく扱って、演劇経験の浅さと人生経験の深さが交わるクロスポイントを提示した。その見事なXの文字は、およそ哲学的で残酷な戯曲に、感動的なリアリティをもたらした。

ところが『95kg と 97kg のあいだ』でもたらされたのは、感動ではなく体感だった。60 代、70 代が大半を占めるゴールド・シアターの面々が見えない砂袋を担ぐ。80 キロ、90 キロ、100 キロ。砂袋が見える、砂袋を感じる。さらに 95 キロと 97 キロの微妙な差を表現しようとして挫折する。その時はすでに、観客は全身で1キロの差をさぐっているのである。登場人物に感情移入するのとは違う、もっと動物的な感覚。そう、頭を砕かれたのは、平均年齢 68 歳の役者の肉体が観客とシンクロするほどの動物的なエネルギーを放出していることだった。そこには当然、回路を開いた蜷川の演出があり、それはもちろん演劇メソッドが支えるのだが、目の前にそんなものが放出され、ダイレクトに体に響いてきたら……。「役者の上手さとは何を指すか」などという、所詮、頭で考えたお題は木っぱ微塵となったのだ。以来、「役者の上手さとは何を指すか」と考える時、「ただし、さいたまゴールド・シアターを除いて」と考えるようになり、今日に至るまで残念ながら、ゴールド・シアターを含めた定義を更新するには至っていないのである。

Kyoko Tokunaga / 演劇ライター

OL、コピーライターを経て、フリーランスの演劇ライターに。演劇専門誌、情報誌、公演パンフレットを中心に、インタビュー、作品解説、劇評等を執筆。現在、「シアターガイド」(モーニングデスク)にて『プロデューサーの視線』、「花椿」(資生堂)にて『ステージが』、『Choice!』(ネビュラエクストラサポート)にて『Stage Choice!』を連載中。東京芸術劇場運営委員および事業企画委員。

キャスト/スタッフ

演出	蜷川幸雄
作	清水邦夫
演出補	井上尊晶
美術	安津満美子
照明	岩品武顕
衣裳	小峰リリー
音響	市川悟
舞台監督	山田潤一
出演	さいたまゴールド・シアター
	NINAGAWA STUDIO
	横田栄司
	他
製作	財団法人埼玉県芸術文化振興財団
主催	フェスティバル/トーキョー

公演/チケット情報

会場　　にしすがも創造舎
チケット料金　全席自由　一般　4,000 円、桟敷　3,000 円
　　学生　3,000 円（要学生証提示）／高校生以下　1,000 円
お取扱い　　フェスティバル/トーキョー（HP のみ）、ぷれいす（電話のみ）、
　　電子チケットぴあ（P コード：391-407）、イープラス
　　埼玉県芸術文化振興財団チケットセンター　048-858-5511（10:00～19:00）【一般 4,000 円のみ】

公演スケジュール

3/18wed	3/19thu	3/20fri	3/21sat	3/22sun	3/23mon	3/24tue	3/25wed	3/26thu	3/27fri	3/28sat	3/29sun
19:00	19:00	14:00	14:00	14:00	休演	14:00	14:00	14:00	19:00	14:00	14:00

F/Tパフォーマンス　チケット 2008 年 12 月 18 日（木）前売開始　※F/T 参加作品は対象外

■チケット取扱
フェスティバル/トーキョー（HP のみ）　http://festival-tokyo.jp
ぷれいす（電話のみ）　03-5468-8113（平日　11:00-18:00）
電子チケットぴあ 0570-02-9999（Pコード予約）http://pia.jp/t　※『サンシャイン 63』と『演劇/大学 09 春』は対象外
イープラス http://eplus.jp　※『サンシャイン 63』と『演劇/大学 09 春』は対象外

・指定席の場合、開演時間に遅れたお客様はご指定のお席にお座りになれない場合がございます。
・未就学児童のご入場はお断りさせていただきます。
・受付開始及び当日券の販売は開演 1 時間前、開場は 30 分前からとなります。
・チケットの払戻、観劇日の変更はできません。
・チケット料金には消費税が含まれます。

F/Tパフォーマンスを、選んで観る。全部観る。誘って観る。学生も観る。
フェスティバル/トーキョーならではのお得なチケットでお楽しみください。　※フェスティバル/トーキョー・ぷれいすのみ取扱い

◇F/T 回数券　*選んで観る！*　※お好きな演目を選んでご覧いただけます。（『サンシャイン 63』は対象外）
3 演目　¥10,000　（¥3,333/枚）、5 演目　¥15,000　（¥3,000/枚）

◇F/T パス（13 演目）*全部観る！*　※全ての演目をご覧になれます。（『サンシャイン 63』は対象外）
¥30,000（¥2,300/枚）

※F/T 回数券、F/T パス（13 演目）のお取扱いについて
・2 月 13 日（金）18：00 まで販売（限定枚数）
・観劇演目・日時が未定でも購入できます。
・購入後は演目・日時のご予約を受付けます。
・予約なしでも当日ご入場出来ます。但し、満席時はご入場頂けない場合がございます。
・確実にご覧頂くためには演目・日時予約をお勧めいたします。
・回数券・パスはご本人様のみ有効です。

◇ペアチケット　*誘って観る！*
チケット 2 枚分の料金から 10%OFF でご購入頂けます。（例／¥4,500×2 枚＝¥9,000→¥8,100）
※2 名同日時観劇のみお受けいたします。 ※当日券のご用意はございません。 ※『演劇/大学 09 春』は対象外です。

◇学生料金　*学生も観る!*
学生　全演目 ¥3,000（要学生証提示）　高校生以下　全演目¥1,000
※東京芸術劇場中ホール公演は S 席　※当日でもご購入できます。

◇Port B セット券（『雲。家。』『サンシャイン 63』）　¥6,400　（¥3,200/枚）
※ぷれいすのみ取扱　※2 月 13 日（金）18：00 まで販売（限定枚数）

3 演目	¥10,000（¥ 3,333/枚）	F/T パス	¥30,000（¥ 2,300/枚）
5 演目	¥15,000（¥ 3,000/枚）	ペアチケット	10%　OFF

フェスティバル/トーキョー09 春　開催概要

名称　フェスティバル/トーキョー09 春
Festival/Tokyo 09 spring

会期・会場　2009 年 2 月 26 日（木）〜3 月 29 日（日）
東京芸術劇場　中ホール　小ホール 1・2
あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）
にしすがも創造舎

プログラム　F/T パフォーマンス　14 演目
F/T 参加作品　5 演目
F/T プロジェクト（シンポジウム/ステーション/クルー）

主催　東京都
財団法人東京都歴史文化財団
フェスティバル/トーキョー実行委員会
豊島区、財団法人としま未来文化財団、NPO 法人アートネットワーク・ジャパン

共催　社団法人国際演劇協会（ITI/UNESCO）日本センター

事業共催　国際交流基金

協賛　アサヒビール株式会社、株式会社資生堂

助成　財団法人アサヒビール芸術文化財団

後援　外務省、社団法人日本芸能実演家団体協議会、社団法人日本劇団協議会

協力　東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、
豊島区観光協会、社団法人豊島産業協会、社団法人豊島法人会

宣伝協力　株式会社ポスターハリス・カンパニー

平成 20 年度文化庁国際芸術交流支援事業

提携事業　東京芸術見本市 2009

プレス用写真/クレジット一覧

『95kg と 97kg のあいだ』

(c) 宮川舞子

ポートレート

蜷川幸雄

横田栄司

(c) 不要